



若者へのメッセージ 19

千葉工業大学惑星探査研究センター所長

松井 孝典

【第二回】自身の天賦の才を知る

人には誰でも、その人にしかない天賦の才がある。問題は、その才に、本人がなかなか気づかないことだ。それに気づけば、その後の人生はまったく異なるものになる。今回は、そのことに関して、筆者の経験を紹介しよう。

充実した人生にするために 時は積み重ねるように生きる

前回、高校3年の時に、自分の人生を考えたことについて述べた。生きている間、その時間を、自分のしたいことに使う、それが人生として、最高の生き方だ、と考え、その後の人生を決めたのだ。では、したいことは何か？ 高校3年当時は、思索する人生を送りたいと思っていた。とにかく思索する、その対象は何でも

よかった。本を読むでもよい。極端なことをいえば、囲碁を打つ、でもよかった。強い、弱いが問題なのではない。盤面で、次の一手を考える、その瞬間が、充実しているように感じられた。

しかし、一方で、「時が流れる」ような、そんな時間の使い方はしたくなかった。「時は積み重ねる」でなければならぬ。これは小学校の時の読書の影響だ。その意味で、囲碁の場合、プロになるのでなければ、思索といっても、

時が流れるだけだ。加えて、いずれは、食べていかなければならない。

というふうな思いを巡らすと、学者という人生が、魅力的に思えた。学者といっても、身内にいるわけでもないから、学者のイメージとしては、小学校の時の友達の親が、思い浮かんだように記憶している。

家にいるときは着物を着て、書斎で本を読んでいる。講義などで、たまに外出するときは、背広姿で、必要な本や書類の類を、風呂敷に包んで出かけていく。

そんなイメージだけでは、どの大学のどの学部に行くのか、具体的には、とても考えが絞り切れない。結局、当時の読書のジャンルが、歴史や哲学や紀行であったこともあり、文学部が一つの選択肢として残った。

一方で、小学校の時に、スプートニクの打ち上げのニュースに感激し、将来の夢として、ロケットの技術者になりたいと、作文に書いていたくらいだから、理科系も捨てきれない。その後、実際に、ロケットの開発をしているのは企業だと知り、工学部は選択肢から除かれた。

「自分の人生なのだから、その時間を自分の好きなように使う」ということは、自分の時間を会社に売って給料をもらう、という人生とは真逆だ。最終的に、理学部か文学部という二者択

一の選択を迫られた。

地球物理学との出会い

なぜ理学部にしたのか、本当の理由はわからない。何となく、本を一生読み続けるのはしんどいと思ったのだろう。東大に入学し、本郷への進学で、いざ理学部になるときに、また迷った。

一般的には学科というが、理学部では慣習的に、教室と呼ばれていた学問分野の一つを、進学時に選択しなければならぬからだ。多くの学生は、小さい時から、数学が好きだとか、物理だとか、生物だとか、気象だとか、地質だとか、いわゆるオタク的な背景があって、これと決めたそれぞれの進学先に行くために入学してくる。筆者の場合には、これまでに述べたような事情で、そんな背景がなかったから、どこに進学するか迷った。

結局、地球物理学という、あまり聞かなかった学問の、その名称の新奇さに惹かれて、そこに進学した。地球なら、宇宙も生物も、なんでも研究できるだろう、と考えた程度の理由である。何をやりたいのか決めきれない、それを先送りしたという事情も、反映している。

本郷に行ってからわかったことだが、「地球物理学」という学問は存在しなかった。地震学、

測地学、地球電磁気学、気象学、海洋物理学という、細分化された5講座の、総称としての意味しかなかったのだ。しかも、それぞれの講座に、学会が付属しているから、地球物理学を研究する場合など、どこにも存在しない。寺田寅彦が、最初にして最後の地球物理学者だということとは、あとになって気付いた。彼以後は、地震学者や気象学者など、細分化された学問しか存在しないのだ。

竹内均先生に誘われて

学者になる夢は潰えたかと思った。思索しようという、その対象がみつからないのだから。そんな窮状を救ってくれたのは、アポロ探査だ。

月の科学が、新しい研究分野として登場したのだ。地球の代わりに、とりあえず月を研究し、いずれ地球に戻ろうと、方針を定めた。しかし、そんな研究をしている講座は、日本にはなかった。さいわい、当時、測地学を研究されていた竹内均先生が誘ってくれた。先生も、これから月や惑星を研究しようと思っていたのだ。竹内研究室は、もともとは、測地学講座、それが地球力学と名称を変え、さらに、地球惑星内部物理学と、その名を変えていた。

というわけで、月の研究を始めたのだが、研

究者として、他の研究者に伍してやっていけるのか、当時はまだ、自分の才能に自信を持てなかった。世界で勝負できる、私にしかない才能は何なのか？ それはまだ分からなかったのだ。

ある時、そのことに気付かされた。竹内先生が、人にはない私の才能として、アイデアの素晴らしさを褒めていたと、人づてに聞いたのだ。そうかと合点がいった。その後、外国で何度か研究者生活を続け、そのことに確信をもった。

自分にしかない、世界の誰よりも優れた才能は何か、それを知ることが大切だ。それは学者や研究者に限らない。誰でも、それぞれにその天賦の才はある。それを知るか、知らないかで、人生は大きく変わる。竹内先生から学んだのは、その才を見極めるという点だ。

その後、自分が、研究者を育てる立場になり、その人の才がどこにあるのか、それを見極めて指導する、ということを中心掛けている。その才を見つけてやれば、テーマはおのずから定まり、誰でも博士論文を書ける。

人にはない自分の、天賦の才が何なのか、なるべく早く見つけるとよい、それが今回のメッセージだ。

